

審査の結果の要旨

氏名 黄 イエレム

本論文は、19 世紀前半のプロテスタント宣教師が中国についての知識を集成していった歴史的経緯について考察した。宣教師の残した書簡や日誌、宣教会の刊行した雑誌や年次報告などを丹念に読み込むことで、分析を進めている。

まず第 1 章では、宣教師マーシュマンが、インドのベンガル地方において『論語』を英訳・刊行した背景を扱う。イギリス東インド会社は、中国語のできる人材養成の必要性を痛感していた。マーシュマンは聖書の漢訳をめざして中国語を学んでいたが、彼の『論語』英訳は中国語分析に焦点をあてることで東インド会社の要望にも応えた成果となった。

第 2 章では、宣教師モリソンが、東インド会社の広東商館に勤務しながら、中国語学習書や中国語辞典などを執筆・刊行した事情について分析した。このような事業は、宣教そのものが清朝に禁止された状況の中で、東インド会社の職務として進められたものであって、商館の実務に役立つ中国語教育に資することをめざしていたと言える。

第 3 章は、マラッカに設けられたアングロ・チャイニーズ・カレッジに焦点をあてる。ミルンは、中国宣教のための足がかりとしてマラッカを拠点に選んだ。これに対し、イギリス人行政官や広東の商館員たちは中国との貿易や外交のために必要とされる知識を求めていた。このようなイギリス人たちの援助を受けて、モリソンたちは宣教師養成ではなく一般的高等教育をめざすカレッジをマラッカに設けることになったのである。

第 4 章では、聖書の中国語訳が実現した経緯について論じる。これは多額の費用と人材を投入した大事業であり、イギリス本国において発言力と資金力を有する英国聖書協会が長年にわたり監督・援助することで初めて可能となった。マーシュマンやモリソンのように中国語を解する宣教師が、翻訳と出版の実務を担当した。

最後に第 5 章では、広州で創刊された英文雑誌『チャイニーズ・レポジトリー』について考察した。広州の英米人コミュニティーの必要性にもとづいてモリソンら宣教師が編集したこの雑誌によって、中国についての多様な情報が集積・共有されることになった。

以上の内容をもつ本論文は、19 世紀初頭のプロテスタント宣教師が中国に関する知識に精通するに至った背景・経緯について詳細に解明した労作と評価できる。とくに、これまで宣教師個人の宗教的情熱が強調されてきた視点を乗り越えて、イギリス人行政官や東インド会社による後援の重要性に注目しつつ宣教師の事業の具体像を論じた点は大きな成果と言える。宣教と帝国主義をめぐる論争的な課題についてどのように取り組むのかなど、いっそうの考究を要する余地も残されているとはいえ、本論文で達成された成果の大きさに基づいて、審査委員会は博士（文学）の学位を授与するにふさわしいと判断する。